

流通革命を

昭和51年、同年代の仲間3人と共に、実家から約70km離れた青森県西海岸の深浦の地に新規入植して、23回目の春がやってきました。太陽の光が強まり、雪が解け、トラクターの爆音が我が農場に響き渡る時、つらかった来し方が脳裏を横切ります。地元民に反対された農地の入手、小遣いさえ確保できなかった1年目、3000万円近い累積赤字で経営に赤信号が灯った昭和56年、収穫できずに畑一面を覆った腐敗ダイコンや小麦の惨状、一緒に参入した友の離脱。しかし、これらの苦しみは、高い授業料でしたが、いい勉強になったと思っています。苦労は修業になるのです。その一方で、楽しかったこともたくさんありました。農場で共に働く人達と無事やり遂げた中国への慰安旅行、100万円に届いた1カ月の報酬、多くの応援者を集めて行われる毎年夏の農場祭などです。そんな思い出をかみしめながら我々の農場は今を見つめ、未来を切り開いていくつもりで、500



筆者のログハウス 「大根庵耕心塾」で農場を訪れた人たちと夜を徹して議論

haの農地で、ダイコン、ジャガイモ、小麦、大豆、ニンジンなどに組み込んでいます。それにしても、昨今の景気低迷は、農場経営にも大きな影響を与えています。私の担当作目であれば、加工ダイコンの売れ行きが厳しくなっています。大口需要先には、これまで農場在庫であっても、契約が成立していれば半分程度は納金してもらっていました。ところが、昨年から、納入した分しか、入金してくれなくなっています。消費者のサイフの引き締めで、タクアン需要が不振なのです。当初、引く手あまたとされた無農薬ダイコンさえ、引き取りがない状況が生じています。

ダイコンだけでなくほかの農産物も大きな打撃を受けています。どこまで続くぬかるみぞ、という感じです。政府の強烈なテコ入れ策が待たれます。とはいえ、今後、景気が回復し、需要に強さがでてきたとしても、資本主義社会だけに、消費の落ち込みは再び生ずる可能性があります。とすれば、そんな事態に対応していくための方策を今から考えることは、経営者の努めです。

私は、その解決策として、流通革命を提唱します。簡単に言えば、消費者と生産者が直結した流通システムにすることです。現在、生産者と消費者の間には、加工品であればメーカーや問屋などがあるし、生食用であれば市場、仲卸しなどが存在します。この流通の流れをもっと直線的にすれば、コストがからず生産者の手取りが増え、消費者もより低価格で購入できると考えられるのです。例を挙げれば、きざみダイコンは農場から出る時は1kg当たり100円ですが、小売段階では1200円にも達している場合があります。複雑な流通経路や小売でのロス・マージンなどによるものです。これを仮に農場から消費者へ直結する販売法で、1kg当たり500円とすれば、我々にとっても、消費者にとっても有利な取引になるのです。

このような形は現在、青空市場などと称して、

生産地で行われてはいますが、規模が極めて小さく、しかもほんの一部の人達だけの実践にとどまっています。もっと幅広く、大型化して取り組んでいく時代になってきているのです。

こうしたシステムの利点は、単に金額面だけではなく、消費者がじかに生産者と触れ合うことにより、安心して購入することができることや、生産者も消費者の生の声を聞くことで、より消費者ニーズに合う作物生産に励むことができるということなども挙げられます。大規模物流の時代だけに、簡単にはことが運ばないのは承知しますが、生産者と消費者の顔の見える関係を積極的に築いていく構えは強く求められているとみえます。

現に、加工メーカーでも、「消費者はメーカーの言葉を鵜呑みにしなくなっているので、生産者が責任をもって消費者に売り込むべきである」と述べているところがあるほどです。自分たちは委託加工だけでもいいとさえ発言するのです。生産者と消費者が信頼し、理解し合う関係を作り上げること、これがこれからの日本農業維持の大きなキープポイントになると確信します。

したがって、これまで加工メーカー主体で進めてきた当農場の販売の枠組みも、当面は加工メーカー3分の1、量販店3分の1、そして消費者直販が3分の1とするようにしたいと思います。

総合、立体的農業へ

ではこの実現のためには、どうすればいいのか。国の農政審議会の会長を務める今村奈良臣氏は6次産業論を展開しています。1次×2次×3次×6次、即ち農業を多角化せよということ述べているのです。これに私は同感するのです。コメ、野菜などを単に生産するだけでなく、自分たちで加工し、自家のレストランで提供し、そして景観までも売り込んでしまおうというものです。これまでも述べましたが、総合農業、あるいは立体農

業の展開です。

幸い、農場には、生産技術があります。1次ではあるが、加工技術もあります。それに加えて、広大な畑、海、山、草原があり、そして、ゴルフ場やスキーリゾート地もすぐ近くにあるという恵まれたロケーションに位置しています。

可愛い家畜がいる、花畑もある、サクランボや栗などの果樹園が広がる。ここで体験農業をしてもらう。見晴らしの良い畑地にはレストランや加工場を建て、消費者にとりたての食や加工品を味わってもらおう。豊かで美しい景観にも触れてもらう。このようにして、訪れた消費者はリゾート気分一杯で一日を過ごす。これこそが、消費者と生産者を直結するシステムではないでしょうか。そこには農業が難しいとされる車椅子の人達の笑顔も溢れている。こんなリゾート農園の青写真を私は描いているのです。

長崎に、役場職員であった神近義邦氏が見事に作り上げた大リゾート基地ハウステンボスがあります。神近氏の立志伝物語は私の心を深く揺さぶります。しかし、ハウステンボスは、確かに魅力ある触れ合いの場をもたらししているものの、極めて無機質な人工的な香りが充満しており、自然や生き物と触れ合うことよって生ずる、優しさや温かさといった人間の内面性を揺さぶるような快適性にはやや欠けるのではとみています。

私は、その対極として農業を基盤とした自然と共存する、柔らかく心に響くものがあり、しかも、ゴミが出ないようなりサイクルシステムも完備したりリゾート農園の開設を夢見ているのです。

「人の恩」忘れずに

この数年、投資がかさんだために、直ちにはこの夢を実現できません。されど、夢を持ち、それに向かって突き進むことが農業経営者の大きな役割でもあると考えます。

国が悪い、世の中が悪い、消費者が悪い、経済界が悪いとグチを言っているだけでは、農業は良くなりません。もちろん、食を生産するという特殊事情から国には要求すべきことはきちんとしなければなりません。まず自らどうするかがなければ、解決の糸口はみつからないはず。経営者たちに自信がなくて、夢がなくて農業に若い人が参入するはずがありません。幸い、農場にはバリバリの若手の人材が育っています。運営は、基本的には代表理事の佐々木君夫(48)と竹内雅孝(47)それに私の3人が基本的にかかわっていますが、その下で30代の4人の課長(うち女性1人)が頑張り、さらに7人の若い社員たちが広い農場狭しと駆け回っているのです。そして、35人のパートのおばさんたちがいぶし銀のように農場を支えてくれています。

元函館海洋気象台台長で現在、下北半島大間町に住みながら青森県の気象予報に知恵を絞っている和田英夫氏が言われた言葉があります。

「農業は天の恩、地の恩、人の努力だ」

この言葉を気に入っていますが、私はこれに「人の恩」も付け加え、心に刻んでいます。

佐々木、竹内と一緒にアメリカのような農業を夢見て1億円の借金でスタートしたこの農場ですが、現在、共に働く人達はもちろんのこと、これまでに出会い、応援してくれた幾多の人達がいたからこそ、今日の500ha、4億円の経営規模を成し遂げることができたのだと思っています。とかく、日々の忙しさにまかして、これまで得てきた人の恩をどこかに置き忘れることがあり、自戒しなければと我が身を叱咤しています。

今年の作付けは、小麦150ha、バレイシヨ90ha、ダイコン60haなど450haです。出身地柏村で、米の転作作物として集団導入する大豆の作業請負を新たに始めます。これも応援してくれた人達へのささやかな恩返しです。

昨年、社員になった大卒の若手が言いました。「今の10倍の規模にしてほしい」となれば5000haです。確かに大きい規模です。しかし、昨年旅したドイツでは何と1経営体で107000haをこなしているのです。それからみると不可能な数字ではないのです。

「夢」は、努力すれば実現するのです。そのためには、常にチャンス芽に目を光らせていくことが我々経営者にとって必要なのです。

12回にわたり、農場の風景、我が思いなどを筆の赴くままに書き連ねてきました。重いトラクタを苦手な軽いペンに持ち換え、チャレンジしてみました。とりあえず、この通信は今号で閉じることにします。多くの読者の皆さん、稚拙な文章を読んでいただきありがとうございます。一つの日か、我が黄金崎農場にいらっしやることを願っています。そして、私のログハウス「大根庵耕心塾」で日本のさざ波を聞きながら、カラオケでも歌って夜を徹して農業の行方について、語り合いたいものです。「農業経営者」の編集者の方々にはいつも遅れがちになる原稿などで大変ご迷惑をかけました。5月からは月刊化されるとのこと、心からご祝福し、さらなる飛躍を期待します。それでは、さらに発展した黄金崎農場の姿を「農業経営者」誌上で御紹介できる日までサヨウナラ。



きむら・しんいち/1950年9月生まれ。青森県立五所川原農林高校卒業。4Hクラブの仲間の佐々木君夫、竹内雅孝とともに「大規模で、企業的で、給料をもらう」農場を夢見て、76年農事組合法人黄金崎農場を設立